

地域生活を支える
社会福祉法人
第259回

社会福祉法人みどの福祉会【群馬県高崎市】の試み



地域に根ざした柔軟な取組で 制度の狭間にあるニーズに応え だれも取りこぼさない地域へ

制度が整っていても、その狭間には声を上げられずに困りごとを抱える人がいる。地域の子ども、高齢者、その家族の幸せを守り続けるために、学習支援、子ども食堂、食品・物品の支援、そして地域の絆を深める福祉カフェの経営など幅広い取組を実践している。

みどの福祉会

法人名
社会福祉法人みどの福祉会

本部住所
群馬県高崎市新町333

URL
<https://midono.jp/>

理事長
丸茂 豊



事業内容

- 認定こども園
- 子育て支援センター
- 通所介護
- 居宅介護支援センター
- 地域包括支援センター
- 学童クラブ



無料学習支援「みどの学習クラブ」の開催や、福祉カフェ「café faden」の併設など、世代を超えた交流と地域貢献の拠点として機能している、新町デイサービスセンター。



地域の祭りに出店し、食品ロス削減を目的としたフードドライブを実施。「もったいない食品を、ありがたい食品へ」を合言葉に、地域への啓発活動を行っている。

社会福祉法人 みどの福祉会の沿革

昭和57年2月、宗教法人浄泉寺が運営していた新町保育園を引き継ぐ形で発足し、同年4月には、隣接地に完成した新たな園舎へ移行。キリスト教精神を設立の基盤とした新たな新町保育園として、その歩みを始めた。

平成12年には、保育園に併設して新町デイサービスセンターを開設。子どもと高齢者が日常的にふれあう場を設けるなど、世代を超えた交流を通じて地域福祉の向上に取り組んできた。

その後、学童クラブや子育て支援センター、地域包括支援センターなどを開設し、子育て期から高齢期まで、地域での暮らしを切れ目なく支える体制を構築。

平成27年には幼保連携型認定こども園へ移行し、園名を「新町かぜいろこども園」に変更。平成

30年には園舎・園庭を移転・拡充することで、子どもたちの生活環境の充実を図っている。

さらにみどの福祉会では、「制度の狭間に挑戦」を掲げ、ひとり親家庭の支援や子ども食堂、フードドライブといった地域に根ざした取組を積極的に展開し、その役割を広げ続けている。

社会福祉法人 みどの福祉会の 理念と方針

【理念】

「人をつなぐ 地域をつなぐ」
「地域の子ども・高齢者とその家族の幸せを守り、さらにそれを強めていく」

みどの福祉会は、地域で暮らす一人ひとりの生活と家族の営みを大切にしながら、世代や立場を超えて支え合う地域づくりをめざしている。子ども、高齢者、子育て

家庭など、人生のさまざまな段階に寄り添い、日常の安心やつながりを積み重ねていくことを法人の使命としている。

理念のなかでも、「さらにそれを強めていく」という言葉は、地域貢献事業を象徴する言葉にもなっている。子育てに悩む家庭、生活に困難を抱える方、制度の対象からこぼれ落ちてしまう方など、地域におけるすべての困りごとに目を向けていきたいと考えている。

どれほど制度が整えられても、そこには必ず「狭間」が生まれる。みどの福祉会は、そうした制度の隙間に目を向け、社会福祉法人ならではの柔軟さを活かしながら、一人ひとりの困りごとに応えていく姿勢を大切にしてきた。「みんなが少しずつ、その狭間を埋めていけばいい」という考えのもと、断らない福祉、困難な事例を見捨てない支援を実践している。

みどの福祉会
の試み

Case 1

ひとり親家庭を支える
無料学習支援
「みどの学習クラブ」

ひとり親家庭の子どもを中心に、無料で学習支援を行う「みどの学習クラブ」。大学生を中心とした学習サポーターとマンツーマンで向き合い、宿題などに取り組んでいる。

みどの福祉会が拠点を置く高崎市新町地域は、平成18年の市町村合併により、旧多野郡新町として高崎市に編入された地域である。小学校2校と中学校1校がコンパクトにまとまる、お互いの顔が見えやすい地域でもある。

福祉課題としては、児童分野では、子育ての孤立化や虐待、発達障害がい児の増加に対する支援不足が顕在化し、高齢者分野では、運転免許返納後の在宅生活の維持が課題となっている。また、分野を超えた共通課題として、生活困窮者への対応や居場所づくりの必要性も高まっている。

新町では合併以前から、登下校の見守り活動や地域サロン、読み聞かせや子育て支援など、民生委員・児童委員を含むボランティアによる自主的な活動が行われてきた。一方で、ボランティアの高齢化や担い手不足もあり、地域のつながりをどう維持していくかが課題となっている。

こうした背景のもと、みどの福

祉会では、ひとり親家庭で育つ子どもの「学び」と「居場所」の不足に着目し、平成28年4月、運営する新町デイサービスセンターを会場として、無料学習支援「みどの学習クラブ」を開始した。毎週水曜日19時から開催し、対象は学習につまづきを感じながらも家庭の事情により塾などに通うことができない小学4年生以上の児童。学習支援は、地域の大学生や社会人サポーターが担っている。

みどの学習クラブは、学力向上を目的とするのではなく、安心して過ごせる居場所としての役割を重視している。参加に当たっては、宿題を仕上げることを一つの目標として、原則一対一で子どもと向き合う体制を整えている。

不登校傾向にあった中学生が「勉強が楽しくなってきた。もっと宿題を出してほしい」と学習に意欲的になったケースなど、子どもたちの変化を感じる場面も多い。また、会話を通して、生活困窮や家庭環境の課題が明らかにな

り、学校やスクールソーシャルワーカーとの連携、次の支援へとつながったケースもある。

制度の狭間にいる子どもや家庭に安心感を提供しながら、関係をつなぐ入口として機能している取組。学びをきっかけに生まれる小さな関係性の積み重ねが、地域全体を支える力となっている。



「きっと勉強が楽しくなる」を合言葉に、一人ひとりのペースを大切にしている。見守ってくれる大人の存在がいることで、学ぶ意欲を少しずつ高めている。



不登校だった子と将来やりたいことを一緒に考え、調べて、高校進学をめざすようになった思い出は、取組を担当する丸茂地域貢献事業部代表の心に強く残っているという。

みどの福祉会
の試み

Case 2

ニーズに応じて
柔軟な対応を続ける「まんまる食事会」と
ひとり親家庭向けランチ会

対面開催していた頃の子ども食堂「まんまる食事会」の様子。食事の提供にとどまらず、子どもや保護者同士のあたたかな交流の場として継続してきた。

みどの学習クラブの取組を実施するなかで、何気ない会話や表情から、日々の食事に課題がある様子が垣間見える子どもがいることがわかり、「食」を通じた支援の必要性を感じるようになった。

こうした気づきをきっかけに、平成28年9月、子ども食堂「まんまる食事会」の取組がはじまった。きっかけは、学習会の送迎に訪れた保護者に「一緒にご飯を食べていきませんか？」と声をかけたことである。食事会の後には、子どもたちやその保護者が、学年や学校の違いを超えて交流を楽しみ、名残惜しそうに過ごす姿が日常的に見られた。丸茂ひろみ地域貢献事業部代表が「お泊まりする？」と声をかけたこともあり、実際にデイサービスセンターでの合宿が実現したこともあった。

新型コロナウイルス感染症の流行により、対面での開催が難しくなったことを受け、現在はお弁当配付の形式に変更している。この変更により、ご高齢者やひきこも

りの方がいる家庭にも範囲を拡大して食を届けることが可能となった。「まんまる食事会」は形を変えながら今年で10年目を迎え、現在は毎月45食を提供している。また、ひとり親家庭限定の食品配付とランチ会を2か月に1回実施。「まんまる食事会」の規模や形式が変化するなかで、「ひとり親家庭同士で気兼ねなく交流できる場がほしい」という声が上がったことが、きっかけとなった。対象家庭が安心して参加できるよう配慮しながら、食事とともに、ゆっくりと話ができる時間を大切にしている。

今後は、生活困窮家庭が抱える子どもたちの体験格差の解消にも目を向け、地域企業や支援者との連携を深めながら、「楽しい経験」を届けていきたいと考えている。伊香保温泉の協力により、ひとり親家庭を対象としたバス旅行も実施したことがある。

困りごとを抱えながらも、相談窓口足を運ぶことに敷居の高さ

を感じている人も少なくない。日常的なかかわりのなかでそうした声をひろい、必要な支援へとつないでいくワンストップの役割を果たしていくことが、今後の目標の一つである。



新型コロナウイルス流行以降は、開催方法をお弁当の配付形式に変更。手づくりする彩り豊かなお弁当は、地域の方がたのしみになっている。



ひとり親家庭を対象に実施した伊香保へのバス旅行。親子で参加できるビンゴ大会では、笑顔と歓声があふれ、会場は大いに盛り上がった。

みどの福祉会
の試み

Case 3

食だけではなく日用品にも拡大
フードドライブ
「フードバンクM・高崎」

「フードバンクM・高崎」では、児童養護施設を出たばかりの若者や、経済的に困窮している妊婦など、さまざまな事情を抱える方がたに、食料や生活物品を提供している。

さまざまな取組を続けるなかで、日々の暮らしにおいて「食べること」や「身につけること」に不安を抱える家庭が、地域に多く存在しているという実感を強めていった。こうした現状に対し、地域全体で支え合う仕組みづくりとして開始したのが、食品ロス削減活動「フードドライブ」をはじめとする食品・物品支援の取組だ。

平成30年7月、みどの福祉会が、地域住民や企業に呼びかけ、家庭や事業所で余っている食品を持ち寄ってもらうフードドライブを開始した。

こうして集まった物資を、安定した支援へとつなげるため、食品支援の拠点として「フードバンクM・高崎」を立ち上げた。名称の「M」には、「見守り」「見放さない」「未来につなぐ」、そして「もったいないをありがとうに」という四つの意味が込められている。

扱う品目は食品にとどまらず、日用品へと広がっていった。新生児用のおむつや粉ミルク、タオ

ル、シャンプー・コンディショナー、文房具など、現在では「暮らしに欠かせないもの」が幅広くそろそろ支援拠点となっている。

支援物資の増加にともない、保管場所の確保が新たな課題となった。当初はデイサービスの一角を活用していたが、現在ではフードバンク専用の倉庫を新たに増築して、業務用冷蔵庫・冷凍庫も設置している。これにより、さらに幅広い品目の寄附を受け入れ、安定的に提供できる環境が整った。

現在では、県内のDVシェルターから地域のアパートに向かう途中で、食料品や日用品を求めてみどの福祉会に立ち寄る人もおり、緊急性の高い状況にある人を支える拠点としての役割も担っている。

また、使わなくなった制服を地域で循環させる「制服バンク」の取組も実施している。この取組も、生活に困窮する子育て家庭からのニーズを受けて始まった。制服バンクを利用した親子が、卒業

時に「無事に卒業できました」とあいさつに訪れたこともある。

これらの取組に共通しているのは、「支援される側」と「支援する側」を明確に分けない姿勢だ。地域の誰もが、ある時は支えられる側になり、ある時は支える側になる。相互扶助の関係を大切にしながら、制度の狭間にある方がたのニーズに寄り添い、支え続けている。



企業・団体・個人から、食料品や日用品など多様な物品がフードドライブに寄せられている。支援の輪の広がりとともに品目も増加している。



制服バンクでは、制服に加えランドセルの提供も実施。まだ十分に使える物品が、支援を必要とする家庭へつながっている。

みどの福祉会
の試み

Case 4

困りごとを
新たな交流につなげる福祉カフェ
「cafe faden」

cafe fadenで開催された「まるカフェ」には、不登校児の保護者と通信制高校に通う生徒が参加。保護者の悩みや疑問に対し、現役高校生ならではの率直な言葉で応える場となり、相互理解を深める時間となった。

困りごとを抱えていても、専門機関への相談をためらう人は少なくない。そうした方がたも含め、地域の誰もが居心地よく過ごせる場として生まれたのが、福祉カフェ「cafe faden」。

令和6年9月より、新町デイサービスセンターにフードバンク、地域包括支援センターの機能をもつ「つむぎハウス」を増設し、その一角に福祉カフェ「cafe faden」をオープンした。現在は、地域の認知症カフェとしての活用をはじめ、不登校の子をもつ保護者、通信制高校の生徒、社会的養護を経験した若者など、多様な立場の人が集う居場所づくりを進めている。

カフェの特徴の一つが、地域で生まれる声をひろいあげ、柔軟に形にしていくこと。例えば、不登校の子をもつ保護者の交流会の開催には、次のような経緯があった。あるとき、中学校の校長先生との会話のなかで、「フリースクールや親の会はあるが、不登校の子をもつ保護者が、いろいろな人と話

せる場所はない」という話しが話題にあがった。これをきっかけに、丸茂地域貢献事業部代表は交流会を企画。知り合いの教育関係者を通じて、元不登校の通信制高校に通う学生にも参加を依頼し、交流をもつ機会をつくった。

今後は、薬物依存症からの回復をめざす人と更生保護会・保護司との交流の場づくりなど、さらに幅広いテーマにも取り組んでいく構想をもっている。

また、2017年から「家庭訪問型子育て支援ホームスタート」事業を実施。この事業は、養成講座を終了したボランティアが家庭を訪問し、「傾聴」と「協働」を大切にしながら子育てを応援するもの。こうした「ホームスタート」の活動と連動し、乳児を育てる母親を支える集いも開催する予定だ。

「制度が整っていても、その狭間にはどうしても取り残されてしまう人がいます。みどの福祉会では、一人も取りこぼさないでい

たいという強い思いを原点に、日々実践を積み重ねてきました。困りごとを抱えながらも声をあげられずにいる人に、どうすれば手をさし伸べられるのか。その問いに、簡単な答えはありません。すべてが順調にはいきませんが、活動を止めずに続けていきたいと思っています」（丸茂地域貢献事業部代表）。

「faden」はドイツ語で糸を意味する。みどの福祉会がこれまで積み重ねてきた実践から得た学びを活かす新たな「拠点」として、糸を一本ずつ紡ぐように、人と人、人と地域の関係を結びながら、誰もが安心して立ち寄れる交差点として、その可能性を広げ続けている。



食品ロス食材を活用したクッキング会とランチ会を実施。調理の中心を担ったのは高校生で、世代を超えた交流が生まれた。